

芸術系ESP教育：映画を用いたパブリック・スピーキング指導

山下, 友子
九州大学大学院芸術工学研究院

冬野, 美晴
九州大学大学院芸術工学研究院

<https://doi.org/10.15017/1650908>

出版情報：基幹教育紀要. 2, pp.131-136, 2016-03-30. 九州大学基幹教育院
バージョン：
権利関係：



芸術系ESP教育 映画を用いたパブリック・スピーキング指導

山下 友子*, 冬野 美晴

九州大学大学院芸術工学研究院 〒815-0032 福岡県福岡市南区塩原4丁目9-1

Teaching English for specific purposes (ESP) to design students Public-speaking training with movies

Yuko YAMASHITA*, Miharuru FUYUNO

Faculty of Arts, Kyushu University, 4-9-1, Shiobaru, Minamiku, Fukuoka, Fukuoka 815-0032, Japan

*E-mail:yama-y@design.kyushu-u.ac.jp

Received Dec. 3, 2015; Revised Jan. 7, 2016; Accepted Jan. 13, 2016

This paper reports on teaching English for specific purposes (ESP) to students in the School of Design. In the class, “Academic English 3” for students studying design, the movie entitled “The Devil Wears Prada” and a design technique textbook were used in order to motivate students to learn English. In the thirteenth and fourteenth week, each group of students (3-4 people per group) chose a few movies and design techniques and made a presentation concerning how the design techniques were used effectively in movies. Each group was required to submit a script (500-1000 words) and slides (10-20 pages) for the presentation. We analyzed the submitted scripts (12,241 words), focusing on the choices of design technique and lexical choices of each speaker quantitatively with respect to frequency levels based on “JACET8000”. The results showed that the students frequently chose design techniques such as “Rule of Thirds” and “Color” to explain how these techniques were used in movies. It was also found that they tended to avoid difficult words and chose basic vocabulary instead, using design terminology in some sentences in order to explain the terminology itself and/or how the design techniques were used effectively in movies. These results suggest that public-speaking training with movies and designs provided the students with opportunities to extend both their specialized knowledge of design and their linguistic knowledge of English.

1. はじめに

経済・社会・文化を一体化するグローバル化時代を迎えている今、世界で活躍できる人材を養成することが強く求められている¹⁾。グローバル化に対応する上で必要となる能力は、多様な文化的背景や価値観を持つ人々を相手に日本人が日本人らしさを保ちつつ自分の考えを効果的に伝え、迅速で正確な意思疎通を図ることができるスキルである。大切なのは、時代にマッチした国際感覚、そして論理的かつ批判的な思考を持って英語で発信する能力を身につけることである。このような

流れの中で、大学の英語教育ではそれぞれの学部において特定の専門分野について、論理的かつ批判的な思考を育て、英語での情報発信力を養う必要があるであろう。特定の目的や専門分野に合わせた英語教育は1960年代から提唱されており、ESP²教育（English for specific purposes の略）と呼ばれている。日本の多くの大学で、実際に、ESP 教育に基づくカリキュラムや授業教材の作成^{3,4}などが行われている。例えば、堀口³はESP 教育の観点からビジネスコミュニケーション分野（交渉、プレゼンテーション、業務内容の語彙）等を含むビジネス英語や、経済分野（経済理論、時事）を含む英語に関連する大学英語教材開発等について報告している。

ESP 教育の事例として、ビジネス英語、経済英語、理工系英語、医療系英語はよく取り上げられるが、音楽・美術・デザインなどの芸術系分野における ESP 教育の事例はほとんどないのが現状である。芸術系分野の学生が、世界最先端のデザインの手法や技術を学ぶためには、デザインに関する専門用語や語彙を学び、専門書を英語で読む力をつける必要がある。また将来、芸術家・デザイナー・研究者として国際的に活躍するためには、自分のアイデアを英語で発信する力は強く求められるであろう。よって、音楽・美術・デザインなどの芸術系分野においても ESP 教育に基づくカリキュラムや授業設計を行うことが重要である。そこで本報告では、筆者らの所属するデザインを教育・研究する芸術工学部における ESP 教育の事例を紹介する。2015 年前期に開講された芸術工学部（工業設計学科・芸術情報学科）の2年生を対象とした「学術英語 3・個別テーマ」における15回の授業設計と、映画を用いたパブリック・スピーキング指導の実践（第12-14回）について報告する。

2. 授業設計

芸術工学部（工業設計学科・芸術情報学科）の2年生を対象とした「学術英語 3・個別テーマ」（2015 年度前期・必修科目）の授業設計を紹介する。この科目は各学科にて開講されており、総受講者数は2学科あわせて87名であった。授業教材として、映画“The Devil Wears Prada⁵”（邦題：プラダを着た悪魔）、映画総合教材「プラダを着た悪魔⁶」を用いた。映画はオーセンティックな語学教材として学習者の興味・関心を高める効果が期待できるため、大学の英語教育においてもリスニング指導⁷、プレゼンテーション課題のテーマ⁸として利用されている。本授業では、映画や映画総合教材に加えて、デザインの法則を解説している“Universal Principles of Design⁹”も授業教材として利用した。授業スケジュールは表1の通りである。第2週目から第11週目は、映画と映画総合教材「プラダを着た悪魔」を利用して、語彙と表現の確認・内容確認・サウンドトラックの聴き取り問題・発音の練習・会話の練習を行った。毎回の授業で、約10~15分程度の映画の場面（英語音声・日本語字幕）を計2回視聴した。1回目は、視聴前に語彙と表現の確認を行い、視聴後に内容確認問題等を行った。2回目の視聴前に、“Universal Principles of Design”の中から抜粋された3~4ユニットのデザイン手法に関する英文を、教員が解説した。視聴後にどの場面において、被写体にどのようにデザインの手法が使われているのかということについて学生同士でディスカッションを行った。第12週目に、学籍番号順にグループ分け（各グループ4-5名）を行い、工業設計学科

で10グループ、芸術情報学科で9グループに分かれた。グループ（4-5名）ごとに、映画とデザイン手法に関するプレゼンテーションの英語原稿と、スライドの準備を行った。第13-14週目には、各グループ15分（質疑応答を含む）と設定して、プレゼンテーションを行った。次の章では、グループ・プレゼンテーションについて詳しく述べる。

表1 授業スケジュール

週	第1週目	第2-11週目	第12週目	第13-14週目	第15週目
授業内容	導入	映画“The Devil Wears Prada”を用いた講義	プレゼンテーション準備	プレゼンテーション（映画とデザイン）	まとめ

3. グループ・プレゼンテーション

3.1. トピック：映画とデザインの手法

各グループ（4~5名）で、英文原稿（約500~1000単語）とスライド（約10~25枚）を準備した。1) 映画1本を選び、その映画の異なる場面の被写体におけるいくつかのデザイン手法を解説するグループ、2) デザイン手法は1つで、複数の映画における同一のデザイン手法を解説するグループ、3) 複数の映画とそれぞれの映画の場面の被写体における異なるデザイン手法を解説するグループがあった。英文原稿には、デザイン手法の用語解説、および映画のどの場面でその手法が使われているかという説明の2点が必ず含まれるように指示された。

表2 プレゼンテーションで取り上げられたデザイン手法に関する専門用語

デザイン手法に関する専門用語	頻度数
Rule of Thirds（三分割法）	9
Color（色彩）	8
Cathedral Effect（カテドラル効果）	7
Face-ism Ratio（フェース率）	7
Top-Down Lighting Bias（上方照明の先入観）	7
Horror Vacui（空間恐怖）	5
Red Effect（赤の効果）	4
Von Restorff Effect（レストルフ現象）	4
Flexibility-Usability Tradeoff（フレキシビリティとユーザビリティの二律背反性）	3

プレゼンテーションで取り上げられたデザイン手法の用語において頻度数の高いものを表2に列挙している。頻度数は映画1本につきデザイン手法の頻度1回とカウントしている。“Rule of Thirds” (三分割法) や “color” (色彩) などのデザインの手法は、どの映画の場面においても適用しやすく、プレゼンテーションで取り上げた学生が多かった。例えば 40 年前の映画「男はつらいよ 寅次郎相合い傘¹⁰⁾」における、部屋の中での3人の会話場面での構図、近年の映画“The Social Network¹¹⁾” (邦題「ソーシャル・ネットワーク」) における会議の場面での構図において、“Rule of Thirds” (三分割法) が用いられていることを述べ、昔も今も変わらず用いられているデザイン手法であることを述べていた。

3.2. プレゼンテーション原稿の語彙分析方法

プレゼンテーションの英文原稿とプレゼンテーションのスライドは、プレゼンテーション終了後に、グループごとに提出した。提出された 19 グループのプレゼンテーション原稿の語彙分析を行った。プレゼンテーション原稿の延べ語数は 12,241 語であった。本報告では、大学英語教育学会の刊行する日本人大学生のために重要な英語語彙 8000 語を集めた語彙集¹²⁾ (通称 JACET8000) における 8 レベルを、語彙の難易度の指標として用いた。また、プレゼンテーションで取り上げられたデザイン手法に関する専門用語について、キーワードを中心に前後に文脈を表示するコンコーダンス・ソフトウェア (<http://www.lex tutor.ca/cgi-bin/conc>) を用いて調べた。

3.3. 結果

図1に、JACET8000 のそれぞれのレベルでのカバー率を示している。JACET8000 の Level 1 は、中学校の英語教科書に頻出する基本単語であり、プレゼンテーション原稿の Level 1 のカバー率は約 80 %であった。つまり、学生は中学校の英語教科書レベルの簡単な基本単語を用いて原稿を作成している。Level 1 に含まれる単語で頻度数の高かった名詞・動詞として “movie (210),” “scene (125),” “have (113),” “effect (108),” “use (80),” “like (74),” “face (63),” “look (59),” “talk (54),” “picture (47),” “design (46)” などが含まれていた。

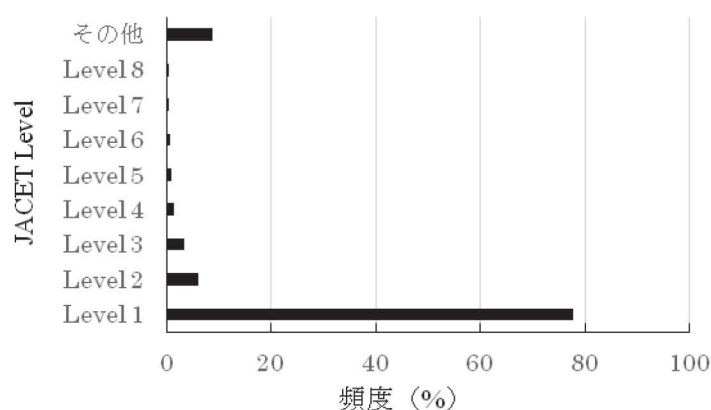


図1 プレゼンテーション原稿における JACET8000 のカバー率

プレゼンテーション原稿において JACET8000 には含まれていない単語のカバー率は、約 8% (1068 語)であった。この中には映画のタイトルや人名などの固有名詞、デザイン手法に関する専門用語などが含まれた。広義にデザインに関連のある単語を列挙する— “vertically,” “horizontally,” “intersection,” “rectangle,” “makeup,” “animator,” “ornamentation,” “hallucination,” “minimalism,” “categorize,” “dissimilar,” “deform,” “operability,” “symmetrical,” “subconscious.” JACET8000 を用いた語彙の難易度の分析結果から、学生は基本単語を多用しながらもデザインに関連のある単語を頻繁ではないが用いていることが示唆される。

さらに表2に挙げているプレゼンテーションで取り上げられたデザイン手法に関する専門用語について学生がどのように英語で表現しているか、キーワードを中心に前後に文脈を表示するコンコーダンス・ソフトウェア (<http://www.lex tutor.ca/cgi-bin/conc>) を用いて調べた。例として、頻度数の高かった専門用語 “Rule of Thirds” を取り上げる。“Universal Principles of Design”⁹⁾ には “A technique of composition in which a medium is divided into thirds, creating aesthetic positions for the primary elements of a design” (p. 208) と記載がある。この専門用語 “Rule of Thirds” を学生がどのような文脈で使っているのか下記に例を挙げる。下記に示すように、多少の文法的な誤りはあるものの学生はデザインの専門用語を自分の言葉で説明し、そのデザインがどのように映画の一場面に影響を与えるかなど表現しており ESP 教育の効果を示唆するものであろう。

1. “**Rule of Thirds**” is a technique that creating balanced position for primary elements of screen.
2. The graph shows that “**Rule of thirds**” has some effects that describe relationship of characters and keep balance of screen.
3. Horror vacuit and the **rule of thirds** has been used in various category of the movie until now from a long time ago.
4. That’s how **rule of thirds** is used effectively not only static scene but also dynamic one.
5. **Rule of thirds** is to locate something along the line which separated the screen of the movie into three.

4. まとめ

本報告では、2015 年度前期に行った芸術工学部の学生を対象とする「学術英語 3・個別テーマ」における 15 回の授業デザインと、映画を用いたパブリック・スピーキング指導について述べた。学生は各グループにてデザイン手法の用語解説、および映画のどの場面でその手法が使われているかという説明の 2 点を含む英語原稿の作成とパワーポイントのスライドを作成して発表を行った。提出された英語プレゼンテーション原稿を分析した結果、学生は基本単語を多用しながらも、デザインに関連のある単語を頻繁ではないが用いていることが明らかになった。またデザインの専門用語を自分の言葉で説明し、そのデザインがどのように映画の一場面に影響を与えるかなど表現しており、ESP 教育の効果を示唆する結果であった。今後、各学部に合わせて ESP 教育の方法を確立していきたいと考える。

謝辞

本報告は、カワイサウンド技術・音楽振興財団（2015 年度）の支援を受けた。

参考文献

¹ 文部科学省(2014). 「スーパーグローバル大学創成支援」

<http://www.jsps.go.jp/j-sgu/> (2015 年 12 月 24 日)

² Halliday, M., P. Strevens, & A. McIntosh. (1964). *The Linguistic Sciences and Language Teaching*. Oxford: Oxford University Press.

³ 堀口和久(2003). ESP と経済英語・ビジネス英語 ―大学英語教育の観点から―. 帝京大学文学部紀要教育学, 28, 145-164.

⁴ 福井希一, 野口ジュディー, 渡辺紀子. (2009). 『ESP 的バイリンガルを目指して―大学英語教育の再定義』 大阪: 大阪大学出版会.

⁶ Aline Brosh McKenna, 神谷久美子, Kim R. Kanel. (2009). 『映画総合教材プラダを着た悪魔』 東京: 松柏社.

⁷ 近藤暁子(2015). 映画を利用した日本人学習者対象のリスニング指導効果. 『映画英語教育研究』, 20, 19-32.

⁸ 森永弘司(2015). 映画 *Dead Poets Society* を利用した 5 年間の授業実践を振り返って. 『映画英語教育研究』, 20, 57-65.

⁹ William Lidwell, Kritina Holden, & Jill Butler. (2003). *Universal Principles of Design*. MA: Rockport Publishers.

¹² 大学英語教育学会基本語改定委員会編 (2003). 『大学英語教育学会基本語リスト』 東京: 大学英語教育学会.

映画

⁵ Frankel, D. (Director), McKenna, B. A., & Weisberger, L. (Writers). (2006). *The Devil Wears Prada* [Motion picture]. United States: Twentieth Century Fox Film Corporation.

¹⁰ 山田洋次 (監督・原作). (1975). 『男はつらいよ 寅次郎相合い傘』. 日本: 松竹株式会社.

¹¹ Fincher, D. (Director), & Sorkin, A. (Writer). *The Social Network* [Motion picture]. United States: Columbia Pictures.